

住職法話「アンパンマン」/やなせ たかしさんを偲び

今年は「あんぱん」としてアンパンマンの作者である「やなせたかし」さんを題材とした朝ドラが放映されていますね。評判も良いのでご覧になっている方も多いかと思います。この方は**小学校の道德の教科書に記載されている**くらいとても評判の高い方なのでご存じの方も多いとは思いますが、やはり私も一度は話をさせて頂こうと思っていました。今回は**梯久美子著『やなせたかしの生涯～アンパンマンとぼく』**を参考に、余りにも多くの活躍がある為、概略になってしまいますがその生涯を振り返ろうと思います。

「やなせたかし」さんは幼い頃に父親を亡くし、母親が再婚した為に柳瀬家(伯父夫婦)へ弟と共に預けられました。ただ、弟は元々子どものいなかった柳瀬家の養子として引き取られたのですが、自身は両親が居なくなって引き取られており、**引け目も感じながら幼少期を過ごした**そうです。コンプレックスを抱えながらも両親や弟などにも支えられ、**元々絵を描くのが好きなことが長じて都内でデザイナーとして働き始めます**。しかし、すぐに**戦争に徴兵**されてしまい終戦後の昭和21年まで、5年間の軍隊生活を送る形になります。戦争の中では多くの経験をされたそうです。仲間たちが次々と戦死し、中国へ上陸した際には占領地の住民の敵対心を和らげる為に、自作の紙芝居を読み、食料や物資を配ったそうです。元々、暴力や争いが嫌いな方でしたが、その時は**日本は「正義の戦いをしている」と信じて苦しみ耐えていた**そうです。終戦間際には厳しい行軍や飢餓で命を落としかけ、終戦後も数か月は中国で待機することになったのですが、現地の方々と交流をしていたお陰で無事に帰国することができたそうです。帰国後に弟の戦死を知り、**信じていた「日本の正義」は終戦後に「武力による侵略」として否定をされます**。何のために自分たちが苦しんだのかという考えの中で**「ある日を境に逆転してしまう正義は、本当の正義ではない」**という考えに至ります。更に**戦後の食糧難の時代**に、食料を奪い合う人々もいれば親子や兄弟で食べ物を分け合う姿を見ることで**「飢えている人を助けるのは国も時代も関係なく、正しいことのはずだ」**という思いが芽生え、後にアンパンマン誕生へと繋がります。終戦後、高知新聞社に入社し、最愛の妻：暢さんとも知り合い、その後に東京へ上京。そして妻と二人三脚で支えあいながら、時にはデザイナーとして**三越宣伝部で働き、その傍ら新聞や雑誌への漫画投稿**をして少しずつ依頼が来るようになります。ただ、ヒット作は無かった為、**漫画以外にも編集や「てのひらを太陽に」の作詞、サンリオの前身となる山梨シルクセンターから詩集の刊行、手塚プロアニメーションの美術監督と幅広い仕事を引受、その度に全力でこなし、人脈を築いていきました**。その結果、仕事の中で作った話が絵本『やさしいライオン』として刊行され、更に手塚先生の援助を受けてアニメーション監督として『やさしいライオン』をアニメ化しました。それらは成功を納め、**絵本をもう一冊作って欲しいと言われて書いたのが『あんぱんまん』**です。まだこの時はあんぱんまんとジャムおじさんしか出てきません。

また、すぐに売れたわけではなく、顔を食べさせるなんて残酷だということで大人からは批判され、出版社からも良い顔をされなかったそうです。しかし、良い話だといってくれたのが「てのひらを太陽に」を共に作った作曲家のいずみたくさんでした。二人は協力して絵本の刊行から3年後、やなせさんが57歳の時に「快傑アンパンマン(ここからカタカナのアンパンマンに変更されます)」としてミュージカルを上演します。そしてそのミュージカルを何度も上映していく中で敵役がいないと話が盛り上がらないとして登場したのがバイキンマンです。また、良い話だと思ってくれていたのは多くの子ども達もでした。保育園などでは子どもたちが何度も絵本を読み、ボロボロになってしまう為、本の注文が何度も入ったそうです。その人気は徐々に会社にも伝わり、次々と『アンパンマン』の絵本作品が出版されていきました。ただ、それからアニメ化されたのは、やなせさんが69歳の時です。アニメではこういった話は難しいと何度も企画を潰され、時にはバイキンマンの削除や顔を食べさせないようにするなど原作改変を迫られて、やなせさんが拒否したことなどにより、なかなか実現をしなかったそうです。それでも時間や地域が限られた放送が実現し、なお子ども達からの人気が高かったことにより、現在まで長くアニメーションとして続いているのです。それは「飢えている人を助けるのは正しいことのはず」「捨身、献身の心なくしては正義を行えない」というやなせさんの信念があったからだと思います。

仏教においてもそれは大切な心掛けです。皆様が今行っている「お盆」は正式には「盆施餓鬼供養」というものになります。うちのお寺では「盆」は故人達が帰ってくる時期、そして「施餓鬼供養」というのは、この世で一番悩み苦しみの炎を出している飢え渴いている方々(餓鬼)に食べ物や飲み物を施してこの世の炎を消すことで故人達が安心して帰ってこれるのだと説明しています。各宗派などで説明は異なりますが、この「盆施餓鬼供養」が「善行」だというのは共通しています。宗教離れが起きる中でもこの「お盆」という行事が今なお大切にされているのは、故人たちが帰ってくるという分かりやすさも勿論ありますが、この「飢えている人に施しましょう」、「自分の物を他者に分け与えましょう」という慈悲の心が、いつの時代も大切だと理解しやすいからこそ今日まで続いているのだと思っています。

現在、アンパンマンは3歳までの子ども達が男女関係なく必ず好きになる作品として30年以上不動の人気を誇っています。そうした作品が仏教と共通した思想を持っているというのはお坊さんとしてはとても心強いことですし、この作品はこれからも続く混迷の世の中で多くの人を励ましていくでしょう。実際、東日本大震災で様々な不安に襲われ、被災地が頑張っているという報道がされる中で、ラジオ局では「アンパンマンのマーチ(やなせたかし作詞)をかけて下さい」という投稿が相次ぎ、その曲に励まされたというメッセージもまた多く寄せられたそうです。歌詞をみても決して優しいだけの歌ではありません。「光る星は消える」なんていう歌詞もあります。しかし、この世の厳しさを伝えつつそれでも頑張って欲しいというやなせさんの思いが、この曲やアンパンマンの作品には満ちているように思います。